

注意欠如多動性障害 (ADHD) のある 子どもの子育て支援



橋本 和明 (花園大学社会福祉学部教授)

～ADHDの特性～

発達障害の一つに、注意欠如多動性障害 (以下、ADHDと記載) がある。この障害は、すぐにものを忘れてり関心がそれて集中できないという「不注意」、じっとしておれず、体の一部を常に動かすなどの「多動」、思い立ったら熟慮なく行動し、欲求のコントロールしにくい「衝動」、という3つの特性が顕著である。そのため、ADHDの子どもはなかなか親の思い通りに動いてくれず、親は大きなストレスを感じやすい。同じような失敗を繰り返し、何度注意をしても言うことを聞いてくれないわが子についていざしめてあげたり、手を出してしまうことにもなりかねない。つまり、このような障害の特性が虐待のリスクとなってしまうやすく、しかもそれが年齢とともにエスカレートしがちとなる。

ADHDの子どもが上記のように指導に乗りにくく、時には行動自体が逸脱となってしまう要因には、そもそもは脳の器質的な問題が影響しているのであって、親の育て方が良かったとか悪かったといったことではない。また、本人は自分の障害に気づかずにいることがほとんどで、「みんなはできているのに、どうして自分は失敗ばかりなのだろう」「なぜ自分ばかり叱られるのだろう」と内面にストレスや不満を抱きやすいことも事実である。

親側も障害のことが理解できていないので子どもを責めたり、時には自分の養育のやり方がまずいのではないかと落ち込んだりしやすい。まして、子どもの年齢が高くなってくると、学校や地域でトラブルを起こし人に迷惑をかけることもあるので、親は批判にさらされてしまう。そうなると、子どもも親も自己嫌悪に苦しみ、出口のない迷路を歩んでいかねばならなくなる。

～2つの事例～

筆者がかかわったあるADHDの子どもの母親がこんなことを述べた。その母親はわが息子の度重なるトラブルに疲れ果て、「誰に聞いても子どもの寝顔は可愛いと言うけれども、私は寝ている時もこの子の顔が鬼のように見える」と。始終動き回ってトラブルばかりを起こすその子の後を母親はついて回り、ようやく寝静まったと思ってホッとしてわが子の寝顔をのぞき込んだ時、その顔が

母親には鬼のように見えたというわけである。今の置かれている子育ての状況はこの母親には過酷な試練にしか感じ取れず、子どもに対しての腹立たしさや情けなさなど、逆境の渦の中に飲み込まれている思いがしたのであろう。

もう一つの思春期になっているADHDの男児ケースでは、外に出て行っては悪さばかりを繰り返すので、家から出られないようにと両親は子どもをロープで縛って、2日間柱にくくりつけた。ここまでくると虐待であるが、逆に考えれば、そこまで親が追い詰められていたとも言える。この男児はいたずらに度が過ぎて、調子によって交番に消化器を撒き散らしたり、海上保安庁に電話をし、「おぼれている人がいるから助けて」と嘘を言うこともあった。わが子ながら、彼が引き起こすトラブルが親には予想もできず、それに翻弄されるだけでなく、四六時中謝罪のために頭を下げる毎日でもあった。

～ADHDへの理解と対応～

いずれにせよ、いかなる場合においても暴力を使用した指導は効果がなく、逆にそれは子ども自身の自己肯定感を低下させ、ますます問題を深刻化させてしまう。親としては興奮に巻き込まれず、できる限り冷静に対処することが結果的には得策である。また、周りの者と比較したり、高い要求水準を持たずに、できたところをしっかりとほめていくというスタンスに切り替えることも大切である。ただ、言うは易しで、実行に移すには相当な訓練や忍耐がいる。そのためにも、一人の親だけでなく、両親が互いに支え合ったり、時には気持ちをほき出せる場所や仲間も有効である。さらに、親自身がこのADHDという発達障害をしっかりと理解していくことも忘れてはならない。このようなかわりの中で、親はこれまで見えてこなかった子どもの長所を発見し、それを子どもにフィードバックしてほめてやると、子ども自身も自己イメージを回復させ、前向きにやっつけていこうという姿勢が増進する。すぐには目に見えるほどの展開は生まれなくても、これまで何もかもうまくいかず悪循環の繰り返しであった親子のかわりが少しだけでも好転に向かうきっかけはつかめるかもしれない。



第14回 総会 記念フォーラムのご案内

子どものサインを受け止めて…！ ～今、子どもと親に向き合って思うこと～

講師：汐見 稔幸 氏 (白梅学園大学学長・東京大学名誉教授)

日時：平成27年6月13日(土) 午後2時30分～4時30分

会場：大阪社会福祉指導センター 多目的ホール(5階)

無料ですが申込みが必要です。詳しくはホームページをご覧ください